

地域水共有物コミュニティの現代的可能性

MODERN STATE AND POTENTIAL OF LOCAL COMMUNITY ON WATER COMMON GOODS

三隅一人

Kazuto MISUMI

九州大学大学院比較社会文化研究院 (〒819-0395 福岡市西区元岡 744)

E-mail: kmisumi@scs.kyushu-u.ac.jp

1. はじめに

防災減災に際して地域社会の担う役割の重要性が指摘される。しかしながらわが国のように全国的に都市化が進み、地域社会が弱体化した現状では、その役割に過度に期待することはできない。ただし、地域社会という枠を緩めてみれば、地域住民はそれぞれの生活様式や志向・関心に応じて、居住地域の内外でさまざまな社会活動を行っている。それらの分散した諸活動を、防災減災のような特定の機能に焦点づけることで、緩やかな地域社会のあり方がみえてくる。

この着想は、都市コミュニティの現実的な形態として論じられてきた有限責任のコミュニティの考え方にもとづく¹⁾。そこでの社会参加のあり方は、「住民一人ひとりの生活体験・専門的知識・技量、趣味・嗜好、ボランティア精神などに応じて…自ら得意の分野で役割を発揮する」ようなものである。したがって場面ごとにリーダーとフォロワーが相互交替的に、あるいはまた別の人に入れ替わりながら、表れる²⁾。

本稿では、こうした有限責任コミュニティの考え方に、コモンズ論の観点を重ねる独自の概念的工夫を行う。そのうえで、防災減災を軸に広く水に関わる生活課題を考慮し、それらに対応する地域コミュニティの現状と可能性を検討する。

2. 地域共有物とコミュニティ

(1) 地域共有物

まず、地域共有物の概念を導入する。地域共有物は、地域生活に不可欠な公共財およびコモンプール財をいう。共

通する重要な性質は非排他性、すなわち、対価を支払わない者をその消費から排除できない性質である。地域共有物は物質的な資源だけでなく、安全、文化、災害知(伝承)、社会関係資本のような非物質的な文化的、社会的資源を含む。その中で水に関わるものを地域水共有物という。

オストロム³⁾の研究以来、コモンズは資源そのものだけでなく、管理レジームまで含めて論じられることが多い。地域共有物も同様ではあるが、レジームとしてコモンズであるか否かを基準とするのではない。例えば、行政任せでコモンズ管理のレジームがない場合も、地域社会の有り様として視野に入れておかなければならない。

(2) 地域コミュニティ

地域共有物の概念をふまえて、一定の地域的な範囲をもつ地域コミュニティを定義する。地域コミュニティは、諸々の地域共有物の管理のための人びとの相互行為がつくる社会システムである。その形態は、すべての地域共有物の管理が同一の社会システムで担われるケースから、地域共有物の種類ごとに担い手となる社会システムが異なるケースまで、多様である。そこで便宜上、単一の地域共有物に対応する部分社会システムを考慮し、これをコミュニティモジュールとよぶ。

全体コミュニティの複数種類の地域共有物が、それぞれ別々のコミュニティモジュールとして管理される形態を、モジュール分業という。また、単一の地域共有物が複数の異なるコミュニティモジュールとして管理される形態を、モジュール分担という。地域コミュニティは一般に、モジュール分業・分担が組み合わさったモジュール複合の形態をとる⁴⁾。

地域住民は、関心があるモジュールにさまざまな活動を

通して主導的ないしフォロー的に関与し、他のモジュールではただ乗り（フリーライド）する。こうした住民の地域コミュニティへの関わりは、自ずと部分的であり、自治会関係の関与を除けば無自覚的な場合が多いであろう。したがって地域コミュニティの機能性を高めるためには、そうして期せずしてなされている見えにくい分業や分担を顕在化することが重要である。

本稿は、水に関わる多様な地域共有物に焦点をおくことで、住民のさまざまな活動や関係性が都市コミュニティモジュール複合として顕在化する、そのあり方を考えてみたい。「水」は恵みと災いの両面から、防災減災とともに復興（地域づくり）に関わる多様な地域共有物を構成する。こうした幅広い視点から地域コミュニティの防災減災機能を考えるためにも、水は重要な論点である。

3. 水とコモンズ、コミュニティ

(1) 水に関わる旧来的コモンズ

水は現代においても地域生活に不可欠な資源であるが、コモンズとしての管理はおしなべて衰退してきた。伝統的なコモンズとしては、飲用や灌漑用の水資源や設備がある。鳥越⁵⁾は、今でも利用されている地域生活用水（水場や簡易水道）の事例を通して、上流では飲用そしてまた信仰の対象となり、洗い用、子どもの遊び場を経て、最後に下流で農業灌漑用となるような、多機能的な水利用のあり方があったことを論じている。コモンズとしての地域生活用水の衰退は、その使用価値の低下だけでなく、社交の場や水を介した文化機能の衰退をとまなう地域の社会文化の弱体化を示しているのである。

水を介した文化機能に関わる地域共有物は、非定形的なものも多くある。例えば、恵みとともに災いをもたらす水をなだめすかして、うまくつきあうための、水の神との交信に関わるシンボルや伝説がある⁶⁾。典型的なシンボルは水の神の化身とされる蛇で、水害リスクの高い地域にはよく蛇を祀る祠がある。婚姻による神との関係強化を暗喩した、蛇女房の伝説もある。河童の妖怪伝説も、身近な水辺利用のリスク管理のための非定形的な地域共有物としてみることができる。

鳥越⁷⁾は、長崎県島原市の船津地区における人びとの河川利用を考察し、「水がそこにあり、その水に感謝しながら使っている日々がある」という表現で、人びとの水に対する態度を捉えている。また、水源としての山について、先祖が見守る山から自分たちを生かす水が発するという考え方があることを指摘している。こうした「伝えられてきた暮らしの姿勢」も、地域社会と水害や水環境との歴史的な関係を伝える、基層文化的な地域共有物といえる。

(2) ニューコモンズとコミュニティ

もちろんここで旧来的な水関係コモンズの復活を唱えるつもりはない。1990年代のコモンズ・ルネッサンスを経て⁸⁾、近年のコモンズ論は、こうした非定形的な「財」もコモンズの枠組みで捉えようとする。このニューコモンズ論では、資源（common pool resource）よりはレジーム（common property regime）に、また、所有よりは利用に、重点がおかれる。その契機となったのは、私有制でも公有制でもなく、レジームによる地域資源管理の現実的可能態を論じたオストロムの研究⁹⁾であった。その後、議論の枠組みは持続可能な発展に展開し、利用管理を一定地域に閉じてみるのではなく、グローバルコモンズや市民コモンズのように、広く地域外に開いた形態も論じられるようになった。こうしたニューコモンズのスタンスに立てば、水に関わる伝承、信仰、シンボル、生活知のような不定形の「財」に関わる現代的レジームを捉えやすい。

一方で、ニューコモンズの一類型として地区コミュニティ（neighborhood）コモンズ¹⁰⁾が論じられる等、レジームとしてのコモンズと地域コミュニティが概念的に混乱しやすい面がある。確かにユイやモヤイ等のローカル・ルールは、レジームの一部であり、同時に地域コミュニティを構成する部分社会システムでもある。しかしながら、コモンズすなわち地域コミュニティではない。コミュニティは種々のレジームを包括するので、その意味ではコミュニティの方が上位概念である。一方でグローバルコモンズを考えると、レジームの地域的構成は、個々の地域コミュニティを越えて広がる。地域コミュニティを外部に開いた社会システムとしてみる必要はある。けれども、弱体化した地域社会にコミュニティの可能性を見出そうという本稿のねらいからして、安易に地域的な境界をはずすことはできない。ローカルな管理のコア的な担い手が見えにくくなるからである。

地域コミュニティを考える際に、所有よりは利用に重点を置くニューコモンズのスタンスは共有したい。第三次産業が優勢な都市では、人びとが物質的な財の生産に関わる機会が減っている。したがって生産活動の共同は望みにくい。しかしながら中田¹¹⁾は、土地の共同をふまえた生活環境に関わる「定住の場」の共同はあるという。中田¹²⁾によれば、良好な生活環境を守るための「共同社会的消費手段」はむしろ拡大して重要性を増している。彼は、その共同管理の要となる地域組織を都市コミュニティとみる。

以上のような点から本稿では、前述のように、ニューコモンズの観点をとりこんだ地域コミュニティの概念を導入した。再度確認すると、資源利用の管理という観点に立って、コモンズを含む地域共有物を幅広く捉えながら、一定地域でそれなりに閉じた社会システムを、地域コミュニティとする。地域コミュニティは、外部環境に開かれてい

るが、外部と一定の境界をもつ。システム境界は地域的なものだけでなく、行政、NPOや企業等がそれぞれ構成する社会システムとの間にもある。地域コミュニティは基本的に地域住民がつくる社会システムであるが、種々の外部事業体が実質的にある地域共有物の管理に参画する場合がある。その場合は、それらの外部の事業体が部分的また一時的に、地域コミュニティに内部化される。とくに地域水共有物の場合、河川や海の循環性とそれによる越境性がある。そこから地域コミュニティ間の連携、あるいは広域コミュニティの可能性もみえてくる。

4. 地域水共有物管理の実際

(1) 地域共有物管理のただ乗り問題

鳥越¹³⁾がいうように、里山、里川、里海を含め、地域共有物は一貫して人の手が入り続けなければならない。現代日本では、多くの地域水共有物は行政による利用管理に付されている。それでも、良好な財供給を維持するためには、何らかの程度で地域社会の関与が不可欠である。そのためには（行政による管理のための税金負担に加えて）、労力や金銭などの負担が必要である。つまり地域共有物管理への人びとの関与は基本的には、地域共有物がもたらす便益と、その管理のための負担との差引勘定にもとづく。これは見方を変えれば、地域コミュニティを、地域共有物管理への協力/非協力という行為水準で捉えることを意味している。こうしてコミュニティ概念を合理的選択理論の枠組みにおいて実証的に捉えられる点は、本稿のコミュニティ概念の強みである。

地域共有物は非排他性をもつので、合理的選択理論からみた管理の主問題は、ただ乗り（フリーライダー）である。管理コストを負担しなくても財の利用から排除されないため、負担をせずに便益だけを得るただ乗りが合理性をもつのである。この問題だけからみれば、地域コミュニティへの関与者が地域住民であるか否かは二次的なことである。高村¹⁴⁾がいうように、都市の地域共有物は正の外部性を生み、管理に関与する住民のみならず都市全体に便益をもたらす。さすがに、地域内の通勤者、来訪者、通過者等も、いくつかの地域共有物に日常的にただ乗りしているといえる。もちろん便益-コストの条件は異なるにせよ、これは地域住民のただ乗りと同じ問題である。

井上¹⁵⁾は、地域住民を中心としつつ幅広く市民を巻き込んだ環境資源管理のあり方を「共治」と称し、「開かれた地元主義」open minded localismと、外部（公的機関・NPO・よそ者）との「かかわり主義」が重要だと論じている。地域住民を軸にしつつも、地域共有物の便益を介して広く薄く広がる受益圏での管理負担のもちあいが、重みをもつのである。

管理に関わる問題をもう一点、述べておきたい。それは、リスク回避の考え方が、地域コミュニティへの人びとの関与を妨げる場合があることである。地域水共有物についていえば、水辺と人間の居住・生活空間を隔離する発想、その裏返しとして事故は行政の責任という考え方が、普及している¹⁶⁾。そのため、子どもが水辺で遊び、大人が日常的に水辺に関わる機会が少なくなった。これは水共有物に限ったことではないが、こうした発想を越えて水辺とのより近い関係を作るためには、「お客さま」ではない地域水共有物管理への関わりが重要であろう¹⁷⁾。

一方で中川¹⁸⁾は、三重県相賀浦における一見放置されているかみえる浜のモリ（守り）の仕方を紹介し、地域社会の変化に応じた「かまいすぎない」水辺とのつきあい方を示唆している。「お客さま」ではない関わりといっても、型通りではない。ただし、そうした適度のかまい方は、漁業を通じた海との長いつきあいから編み出されたことでもある。水辺との関係が変わり、疎遠になっていく中で、どういう「つきあい方」を引き継いでいくか、あるいは引き出していくかが課題である。

以上を念頭におきつつ、水に関わる地域コミュニティの現代的可能態を、事例からさぐっていききたい。

(2) オープンスペースとしての管理

コモンズの歴史的経緯をみると、耕地のまわりのオープンスペース（里山や奥山）を入会権によって、地主による囲い込みから守るという文脈があった。19世紀半ばのイギリスで、コモンズ保存協会が設立したナショナル・トラストが代表例である¹⁹⁾。そこでは、都市民が自然を楽しめるような、イタリア風景画の「絵のように美しい」場所として、湖水地方のオープンスペース保全が進められた。

わが国では、北海道霧多布湿原の事例がある²⁰⁾。この湿原は漁村に隣接し、もともと昆布を運ぶ馬の放牧地としても使われていたが、その用途がなくなると個人の分割所有とされた。その後、自然景観や生物多様性の評価が高まり、オープンスペースとして誰でも湿原に入れるように、管理がナショナル・トラスト式に移行された。当初は地主から地権を買い取ることはせず、来訪者に「ありがとう」の手紙を地主宛に書いてもらうことで、徐々に使用権が譲渡されたという。その後買い取りが進み、2022年時点で湿原面積3168haのうち1073haが保全地となっている。その過程で、ソーラーパネル設置計画地の取得・保全も率先してなされている。

直接的な意味で水共有物ではないが、熊本県の阿蘇グリーン・ストックは、より中間的なオープンスペース形態を示唆している。ここでは「コモン・みんなの大地」のローガンの下、利用目的を限定した特定入会権を都市住民に提供している。ある意味で、地域コミュニティの境界を段

階的に設定するような方法である。

オープンスペースとしての地域水共有物の管理は、地域社会の外部の人たちに対する外部効果を増し、地域コミュニティへの直接的な関与よりは、幅広い支援を得ることに適している。こうした支援は間接的に、地域社会内部のただ乗り問題を低減する波及効果もある。

(3) コミュニティモジュールとしての溜池

わが国には多くのため池があるが、老朽化により水害が心配されるものが少なくない。防災減災の観点から着目すべき地域水共有物のひとつである。

大阪府では1991年から「溜池アオシス構想」を進めている²¹⁾。基本理念は「共圏文化の創造」、すなわち、地域住民が自ら「共生(ともいき)する」空間の創造を謳っている。公園ではなく、行政管理に移管しない原則で、1) ため池の多面的機能の保全・活用、2) 池の個性を生かす整備、3) 多面的保全・活用を支える社会システムの構築、を指針としている。この指針ののっとり、池ごとに地域住民で「ため池環境コミュニティ」(当初は「環境自治会」と称した)を作り、整備計画への参画や維持管理を行っている。一例として伊賀今池(羽曳野市)の事例²²⁾をみると、町内会、水利組合、婦人会、子供会、老人クラブ等が加わって「ふれあう水辺づくり委員会」を編成している。管理の中核はこの組織だが、草抜きや清掃は地域住民の総出である。一般住民にとっては親水ゾーンでの余暇活動が主な便益である。

この例は、行政が住民の主体的管理を促す枠組みをつくる形で、「お客さま」ではない住民のため池管理への関与を引き出そうとするものである。複合機能型利用に変換することで多くの一般住民にとっての外部効果を増し、その代わりに農家が負担してきた管理を分担する。このように合理的選択を前提にしてただ乗り防止が考慮されている点も留意される。遊水地、湧水や井戸、灌漑用水や分水施設、河川敷等のほか、災害伝承館のような地域水共有物にも応用できるであろう。

(4) 流域コミュニティの可能性

戦後の林業衰退に伴って実質的な「流域社会」は崩壊したが、その後、森林の公益機能の見直しが進んだ。水源涵養、土砂流出防止、保健休養、酸素供給・大気浄化、といった機能である²³⁾。1991年には森林法が改正され、その中で「流域管理システム」の考え方が示されている。大野²⁴⁾がいうように、山と川と海は自然生態系として有機的に連関し結びついている相対的存在だという認識は、防災減災の観点からみても重要性を増している。そこで彼が主張するのが「流域共同管理」、すなわち、中・下流域の住民が上流域の住民と一緒に流域の自然環境を共同で

管理していく方法である。

前述の阿蘇グリーン・ストックは、上水道を100%地下水に頼る熊本市等の中・下流域との関係でいえば、流域共同管理の枠組みでの地域コミュニティ連携の側面をもっている。

三井²⁵⁾が紹介している鳥取県境港市の事例では、1981年に境港市が日野川上流・日南町の森林を取得している。林業労働の第三セクターに境港市側が出資して造林し、造林を通して市民交流も行っている。

北海道では、やはり1980年代から、全道的に北海道漁協婦人部連絡協議会を中心とした植林運動が展開されている。「百年かけて百年前の浜を取り戻そう」というスローガンのもとに進められている「お魚殖やす植樹運動」である²⁶⁾。一例として、道東の別海町では、1988年から漁協婦人部が森林組合の森林ボランティアに参加し、サケ・マスの孵化場となる河川周辺を中心とした植樹が進められた。植林において利害が対立しやすい酪農農家の合意をとりつけ、運動は徐々に町全体に広がった。その後、開発業者による土地取得を防ぐために、野付漁協による山林取得もなされた。植樹は婦人部が中心だが、漁協として「木を植える漁業者」を自認している。そうした中、パルシステム(旧、首都圏コープ事業連合)との連携が実現し、「海を守るふいどの森づくり基本協定」が2001年に締結された。首都圏組合員による植林への資金・労力提供の代わりに、野付湾でとれた海産物を届ける仕組みである。

首都圏でも、鳩ノ巣フィールドの森林ボランティア活動の事例がある²⁷⁾。自然保護や環境問題を前面に出すのではなく、森林や自然へのパーソナルな関心と関わりを尊重している。活動の日常性もそのひとつである。会則も、会費もない。森林の手入れは、JR青梅線鳩ノ巣駅から歩いてすぐの利便性を生かし、事前の申し込みと参加費のみで誰でも気軽に参加できる。

流域共同管理の場合、個別の地域コミュニティが主導的な役割を果たすことは難しい。むしろ、自治体や漁協、NPOのような機能性の高い事業体が主軸になり、そこに流域の地域コミュニティが関与していく形が実際的だと思われる。その中でも、別海町の例が示唆するように、地区漁協のような事業体は漁村社会との関係が深いため、町全体への運動の普及につながりやすかったものと推察される。その意味で、ローカルな基盤を共有する事業体が主導する方が、地域コミュニティとの連携はつくりやすいといえるだろう。

5. 水意識と防災意識

(1) 「災いの水」接点と防災意識

最後に、地域水共有物コミュニティがもつ防災減災の機

能を、人びとの水意識と防災意識の関連から検討しておきたい。データとして、筆者らが佐賀県武雄市で実施した市民意識調査（以下、武雄調査とよぶ）を用いる。武雄調査の実査は2022年2月、郵送で調査票の配布と回収を行った。対象者は武雄市在住の20～80歳男女3,000人を計画サンプルとし、無作為抽出した。性別と年齢は比例配分を行った。回収は930票、回収率31.0%である。

武雄調査の主題は、2021年北部九州8月豪雨災害と脆弱性との関係である。当市における水害は、有明海に注ぐ六角川の堤防決壊を防ぐために、支流から六角川への排水ポンプを停止することによる内水氾濫が主である。浸水被害は1663戸（8月25日市の公式発表）、その9割は朝日町、橘町、北方町の3地区に集中した。田畑被害は六角川流域のみならず、唐津湾に注ぐ松浦川の氾濫による武内町の被害も大きい。まずはこの被災の状況を、回答者自身の回答にもとづき「浸水被害」「他被害」「被害なし」に3区分して捉える。また、避難行動を「自宅外避難」「自宅垂直・車避難」「避難なし」に3区分して捉える。この2つをもって、「災いの水」接点の強さの指標とする。

防災意識は下記a)～f)の6項目について、当てはまる項目数と、当てはまらない=1点、どちらでもない=2点、当てはまる=3点とした合計得点平均からみた防災準備度を、指標とする。

- a) 災害時の避難のタイミングを決めている
- b) 近くの避難所とそこへの安全な道筋を知っている
- c) 非常用持出袋の備えがある
- d) 戸別受信機を知っている（設置済みを含む）
- e) 武雄市防災アプリを知っている（使用中を含む）
- f) 地区の自主防災組織の連絡先を知っている

表-1 「災いの水」接点と防災意識

		防災項目数	度数	防災準備度	度数
豪雨被害	浸水被害	2.3	215	2.21	203
	他被害	2.1	141	2.17	132
	被害なし	2.1	539	2.11	509
	F検定	2.2		2.58+	
	Tukey 多重比較			浸水被害－被害なし：0.103+	
豪雨避難	自宅外避難	2.5	87	2.28	82
	自宅垂直・車避難	2.2	59	2.28	53
	避難なし	2.0	732	2.10	691
	F検定	4.5*		5.65**	
	Tukey 多重比較	自宅外避難－避難なし：0.47**		自宅外避難－避難なし：0.176* 自宅垂直・車避難－避難なし：0.179+	

※ ** は1%有意, * は5%有意, + は10%有意. 以下同様.

「災いの水」接点のカテゴリー間で防災意識指標の平均値を比較した結果が、表-1である。下部の多重比較はTukeyの方法を用い、平均値の差が有意であった比較ペアを書き出している。これを見ると「浸水被害」および「自宅外避難」の経験が、防災意識に結びついていることがわかる。中でも避難行動の経験の結びつきが強い。「災いの水」の記憶は、避難のように実際にとった行動を介してより強く残り、防災意識と影響し合うことが示唆される。

(2) まちづくり意識と防災意識

水が災いとともに恵みをもたらすことは、防災減災がまちづくり（災害後の復興を含む）と表裏一体であることと平行である。武雄調査はまちづくりに関わる質問をいくつか含むので、それらの回答と防災意識の関係を、水との接点に留意しながらみてみたい。

まず、まちづくりへの態度を基礎づける地域に対する愛着（モラール）を、以下4項目（賛否4段階回答）に主成分分析を施して得られる主成分スコアで捉える。

- ・自分たちのまちは、自分たちでつくっていききたい
- ・地域の自然・伝統・文化を守っていききたい
- ・できれば今の地域にずっと住んでいきたい
- ・もし転居しても将来的には戻ってきたい

この主成分スコアと防災意識の相関をみたのが表-2である。全体での相関とともに、2021年8月豪雨で浸水被害ありの人、被害なしの人、自宅外避難ありの人、避難なしの人にそれぞれ限定したときの相関を比較している。いずれも有意な相関が認められるが、被災の影響が大きかった人たち、すなわち「災いの水」接点が高い人たちの間で、より高い相関が認められる。「災いの水」経験が、地域への愛着と防災意識の関連を強めるのである。

表-2 地域愛着と防災意識の相関

	防災項目数	防災準備度平均
全体	.275**	.153**
浸水被害あり	.350**	.296**
被害なし	.234**	.121**
自宅外避難あり	.347**	.223**
避難なし	.254**	.147**

武雄調査では自由回答の形式で、武雄の魅力と新幹線への期待を尋ねている。この回答記述からKH-coderによって語句を抽出し、それらの語句を、表-3に示す7つのカテゴリーにコーディングした（詳細は末尾の付録A参照）。水に直接関係するのは「河川ダム」、「温泉地下水」、「災害」の3つで、あとは幅広くまちづくりに関係する。少数ではあるが、ネガティブな文意で語句が言及されている場合も含む。表-3は、カテゴリーに含まれる語句への言及の有

無別で、防災意識指標の平均値を比較している。

防災項目数は各カテゴリーとも、言及があるグループの平均値が有意に高いが、唯一の例外は「災害」である。武雄の魅力や発展を語る中で「災害」に関わる語句に言及するのは、「災いの水」意識の高さを示している。したがって「災害」言及は防災態度と連動すると予想されたが、この結果をみる限りそうとはいえない²⁹⁾。防災準備度について有意な平均値の差があるのは「河川ダム」のみなので、武雄の魅力や発展に関わる語りと防災意識の関連は、個々の防災項目をどれほど強く意識しているかよりは、どれほど多くの防災項目を意識しているかという側面で強いと思われる。

そうした限定はあるものの、「災害」とは異なる水関連のカテゴリーに防災意識との関連が強く表れたこと、また、水に直接関わらないカテゴリーも防災意識と一定の関連をもつことが確認できたことは、人びとの意識からみたまちづくりと防災減災の表裏一体性を示唆していて、興味深い²⁹⁾。

表-3 武雄の魅力語る語句と防災意識

		防災 項目数	防災 準備度	度数
河川ダム	言及あり	2.9	2.31	30
	言及なし	2.0	2.14	900
F 検定		9.5**	2.8+	
温泉地下水	言及あり	2.4	2.13	185
	言及なし	2.0	2.15	745
F 検定		12.4**	0.1	
里山自然	言及あり	2.5	2.18	184
	言及なし	2.0	2.13	746
F 検定		18.9**	0.9	
文化シンボル	言及あり	2.3	2.11	237
	言及なし	2.0	2.15	693
F 検定		11.2**	0.9	
田園評価	言及あり	2.3	2.11	237
	言及なし	2.0	2.15	693
F 検定		5.5*	1.3	
災害	言及あり	2.4	2.16	37
	言及なし	2.1	2.14	893
F 検定		2.1	0.0	
文化行動	言及あり	2.3	2.10	284
	言及なし	2.0	2.16	646
F 検定		8.2**	1.9	

6. 結語

高村³⁰⁾は都市の地区公園管理の例を分析し、公園の活

発な利用者層と熱心な維持管理者層にずれがあることを指摘している。同時に、多くの地域で、ゲートボールやガーデニング等の組織された活動への参加者が、その活動の前後に公園の維持管理活動を町内会による取組とは別に、自発的に行っていることを指摘している。このように、地域住民が思い思いに地域共有物に関わる有限責任コミュニティ、本稿で導入した概念枠でいい換えれば、諸々の地域共有物に関わるコミュニティモジュールが分業と分担によって複合する形態が、現代コミュニティの一般形である。地域共有物を水関連に特定してもその点は変わらない。ただしいくつか強みがある。

フリーライダーの抑止については、自治会がモニタリングによってその役割を担っていることが指摘される³¹⁾。ただ、都市化地域ではその有効範囲は限定されるし、その役割を強化すれば逆に自治会離れが進むといった逆説的な側面もある。有限責任コミュニティにとって重要なことは、むしろ、相互の関連性を含めた各々の地域共有物の可視性だと思われる。つまり、誰がどこでどのような形で管理負担を担っており、どんなもの、またどんな活動が自分の生活とどう関わっているか、といったことの見えやすさである。この可視性が全体としての地域社会信頼を強め、それが内面的なモニタリング機能を果たす³²⁾。

水は、余暇や子どもの遊び、文芸、食の安全、景観、防災等の地域住民の諸活動を包括的に関連づける格好のキーワードになる。武雄調査でみたように人びとの意識構造としても、「水」は防災意識とともに、まちづくりにつながる地域への愛着や生活環境認識と直接・間接に関係し合う。地域水共有物としての多様性、そしてまた人びとの水関連意識の広がりふまえて、まちづくりと防災減災が一体となった目的複合型イベントを組むこともできる。

また、水には「恵みの水」としての感謝や楽しみがもつ吸引力がある。諸活動をマネッジする際、あそび参加に自然と管理負担を組み込むような工夫がしやすい。多くの人の関心を集めやすいので、小さな負担を拡大し、その集積によって管理機構を動かすような試みもできる。

水共有物には、その管理負担もち合いの根拠として、直接的な便益よりもリスク回避（それによる間接的・長期的な潜在的便益）が説得力をもつものがある。防災や水環境に関わる地域水共有物ではその性質が強い。とくに防災については「わざわざの水」がもたらすリスクの回避、という利害の地域的な共有度が高く、一人では無力という共通認識もあるので、それが広く住民のコミュニティ関与を促す誘因となり得る。

一方、難しさとして、多くの地域水共有物の管理には行政が関与しているため、「水」の疎遠化や「お客さま」意識が生じやすい³³⁾。ただしこれは、行政と地域の連携のしやすさにもなる。そのためには、行政側が管轄を超えて連

携し、地域水共有物コミュニティにおける諸活動の多次元性に対応することが重要になる。

付記：本研究は科学研究費補助金 学術変革領域研究(A)計画研究 21H05179「水共生を支える社会・文化・行動の解明：守るべきものの、変わるべきもの」(代表 藤岡悠一郎)、基盤研究(C)(一般) 23K01795「社会関係資本としてフリーライダーを活用する地域コミュニティの探究」(代表 三隅一人)、の補助を受けています。武雄市調査に際しては、九州大学アジア・オセアニア研究教育機構および未来共創リーダー育成プログラムの補助を得ました。調査にご協力いただいた武雄市役所および武雄市民の皆さまに、感謝申し上げます。

注・参考文献

- 1) Janowitz, Morris: *The Community Press in the Urban Setting*, Free Press, 1952.
- 2) 奥田道大:『都市型社会のコミュニティ』勁草書房, p. 224, 1993.
- 3) Ostrom, Elinor: *Governing the Commons: The Evolution of Institutions for Collective Action*, Cambridge University Press, 1990.
- 4) ここで導入したコミュニティ概念のより詳細な議論としては、下記を参照されたい。
三隅一人: 地域共有物を生み出す社会システムとしてのコミュニティ, 西日本社会学会年報 21, pp. 65-76, 2023.
三隅一人: コミュニティモジュール複合—コモンズ論とコミュニティ論の融合, 社会分析 50, pp. 93-110, 2023.
- 5) 鳥越浩之:『水と日本人』岩波書店, pp. 30-31, 2012.
- 6) 鳥越浩之: 2012 前掲, pp. 73-81.
- 7) 鳥越浩之: 2012 前掲, p. 21.
- 8) Clippinger, John and David Bollierm: A Renaissance of the Commons: How the New Science and Internet are Farming a New Global Identity and Order, Ghosh, R. A. (ed.), *CODE: Collaborative Ownership and the Digital Economy*, Massachusetts Institute of Technology, 2005.
- 9) Ostrom, Elinor: 1990 前掲. そこでは効率的なレジームのための3つの条件が示されている。
①信頼的コミットメント
②モニタリングコストの低減
③環境変化に対応した適切なルール
の進化
いわゆる「共有地の悲劇」は、こうしたレジームがない無社会状況を前提にしている。
- 10) Hess, Charlotte: *Mapping the New Commons*, Social Science Research Network (1356835), 2008.
- 11) 中田実: コミュニティと地域の共同管理, 倉沢進・秋元律郎 編著『町内会と地域集団』ミネルヴァ書房, p. 200, 1990.
- 12) 中田実:『地域共同管理の社会学』東信堂, p. 183, 1993.

- 13) 鳥越浩之: 2012 前掲書, p. 220.
- 14) 高村学人:『コモンズからの都市再生 地域共同管理と法の新たな役割』ミネルヴァ書房, p. 45, 2012.
- 15) 井上真:『コモンズ思想を求めて』岩波書店, 2004.
- 16) 鳥越浩之: 2012 前掲, pp. 151-152.
- 17) 西川正:『あそびの生まれる場所 「お客様」時代の公共マネジメント』ころから, 2017.
- 18) 中川千草: 浜を『モリ(守り)』する, 山泰幸・川田牧人・古川彰編『新しいフィールド学へ 環境民俗学』昭和堂, pp. 81-99, 2008.
- 19) 鳥越浩之: 2012 前掲, pp. 192-196.
- 20) 鳥越浩之: 2012 前掲, pp. 156-159. 記述の一部は、筆者が2023年9月に霧多布湿原で行った巡検と管理センターでの聞き取りにもとづく。
- 21) 池上甲一: 市民コモンズとしての溜池の意味論—水から見る都市・農村の環境観, 年報村落社会研究 32, pp. 45-47, 1996.
- 22) 池上甲一: 1996 前掲, p. 50.
- 23) 三井昭二: 森林からみるコモンズと流域, 環境社会学研究 3, pp. 40-43, 1997.
- 24) 大野晃:『山村環境社会学序説』農文協, p. 30, 2005.
- 25) 三井昭二: 1997 前掲, p. 43.
- 26) 「お魚殖やす植樹運動」は、下記で紹介がある。三保学・森元早苗・室田武:『コモンズ研究のフロンティア 山野海川の共的世界』東京大学出版会, pp. 175-180, 2008. 別海町の事例に関する一部の情報は、筆者が2023年9月に現地で行った巡検と野付漁協での聞き取りにもとづく。
- 27) 富井久義: 森林ボランティア活動における社会的意義の語られ方—都市住民が形成するコモンズとしての鳩ノ巣フィールド, 環境社会学研究 23, pp. 102-105, 2017.
- 28) 「浸水被害あり」, 「自宅外避難あり」回答者の「災害」カテゴリ一言及率は有意に高いものではないので、ここでの「災いの水」意識には被災体験とは異なる文脈も混在していると思われる。
- 29) ここでは防災意識に焦点をおいたが、防災意識はまちづくり参加意欲と一定の関連をもつ。武雄調査では「参加してもよいと思うまちづくりの取り組み」を、防災・安全、衛生・清潔さ、お年寄りや病弱者の福祉、子どもたちの保育・教育、自然環境、経済や活力の6カテゴリで聞いている。このどれかに参加意欲を示す回答者の防災項目数の平均は2.3と、それ以外の回答者の1.7より有意に高い。ただし、防災準備度に有意差はない。まちづくり参加意欲の有無は、被災・避難の経験と組み合わせたクロス分類表でも有意な関連を示すので、「災いの水」接点が防災意識とまちづくり参加意欲をともに強めている可能性が示唆される。
- 30) 高村学人: 2012 前掲, pp. 70-72.
- 31) 高村学人: 2012 前掲, p. 22.

- 32) Misumi, Kazuto: Free Rider Facilitated by Trust, *Journal of Culture Contents* 8, pp.95-114. 2016. ただし地域社会信頼にはフリーライダーを促進する逆機能もあるので、その差し引きを考慮する必要がある。
- 33) 西川正: 2017 前掲。

付録A. 武雄調査の自由記述から抽出された語句のコーディング・ルール

※同じ語句で言い回しや品詞が異なるものはとりまとめて示している。

◎河川・ダム

ダム 治水 六角川 水路 ポンプ 河川敷 湖 湖水 湖面 水神 石橋 川端 堤防 浸水 排水 溝 池

◎温泉・地下水

温泉 湯煙 出湯 足湯 浴場 武雄温泉 お湯 水 泉 水質 湯上がり 入浴 シャワー 洗濯 トイレ マンホール 雨

◎里山・棚田・自然

御船山 黒髪山 神六山 杵島山 桜山 青螺山 男岩 天山 八幡岳 眉山 男岩 夫婦岩 白岩 岩 奇岩 黒曜石 風穴 山々 山上 山頂 頂上 裏山 連山 丘 植物 楠 大楠 樹齢 巨木 巨樹 梅(林) 菜の花 桜(並木) 山桜 ツツジ 新緑 みどり 紅葉 落葉 コスモス イチョウ 銀杏 花ふぶき 満開 咲き乱れる 生い茂る 並木 木々 草花 草 樹 竹(やぶ) 街路樹 四季が丘 鳥獣 動物 シシ うさぎ 小鳥 渡り鳥 ホタル 野生 農業 農家 百姓 農道 田んぼ 田畑 農作物 施肥 収穫 稲穂 麦秋 野菜 芋 麦 畜産 馬 森林 伐採 鎮守 田舎 荒野 山里 星空 自然 生態 生命

◎文化シンボル

歴史 文化 伝統 文化財 史跡 寺社 神社 参道 お寺 仏閣 不動尊 お祭り 大祭 大蛇 龍 流鏝馬 街道 町並み 楼門 天井 干支 十二支 神秘 庭園 大聖寺 円応寺 藩主 鍋島 龍造寺 芸能 踊り 巫女 境内 神様 縁結び 聖地 名所 有名人 特産 土産(物) 陶芸 焼き物 窯元 陶工 陶磁器 有田焼 お茶 シンボル モニュメント 図書館 宇宙科学 チームラボ ライトアップ 資料館 物産館 美術館 朝市 餃子

◎田園評価

田園 楽園 田舎 散歩道 風流 メルヘン ロマン 風景 眺望 眺め 一望 雄大 のどか 和やか のんびり カントリー 環境 自然豊か 空気 四季 季節 山紫水明 さえずり 静寂 静か 香り 炭素 郷土 故郷 人情(味) 街並み 公園 魅力 産地 活性 活気 利便 発展 移住 転入 転出 空き家 繁盛 賑やか 賑わう 賑わい 便利 不便 豊か ゆとり おちつく さびれる うるおう 恵み

◎災害

災害 大雨 水害 豪雨 河川 氾濫 被害 被災 浸水 床下 床上 土砂 避難 ゴミ 農薬 地層 脆弱 防災 防音 消防 消防署 支援

◎文化行動

交通 鉄道 線路 電車 特急 新幹線 道路 高速 バス タクシー 乗り換え 旅行 通勤 通学 買い物 ショッピング 帰省 運賃 お

客 乗客 宿泊 旅館 ホテル 修学旅行 観光 駅舎 駅前 交流 喫茶 カフェ 商店 モール ライブハウス 映画館 図書館 地産 ちゃんぽん トラットリア のり 産直 作家 作品 遊び(心) スポーツ ゴルフ サッカー テニス ボート プール 散策 散歩 ウォーキング オルレ 登山 ジョギング マラソン サイクリング キャンプ ボーリング ドライブ 花見 プロジェクトマッピング プラレタニウム 鬼ごっこ サークル イベント 祭り 七夕 秋祭り 花火 独楽 お正月 お盆 参拝 詣で お参り 御朱印 夏休み 校歌 子育て 育児 保育 学習 あいさつ 助け合う もやい

(2023. 10. 20 受付)